

シンポジウムⅢ

診療参加型臨床実習に参加する学生への患者からの評価を考える

座 長
羽村 章¹⁾演 者
鬼塚千絵²⁾ 藤井健男³⁾ 大津光寛⁴⁾ 斎藤隆史⁵⁾

企画の意図

羽村 章

診療参加型臨床実習とは、歯科学者が患者の同意を得て指導歯科医の下で実際の歯科医療に携わり歯科医行為を行う臨床実習、と定義されている。そしてこの目的は、患者を全人的・全身的に捉える態度を養うとともに、歯科医師として必要な基本的臨床能力を習得することとしている。臨床実習期間が終了するまでに必要な態度と技能が修得できるよう、指導歯科医は学生が行う診療の指導や監督を行いながら、診療ごとに参加した学生を評価し、態度と技能の到達度が向上することを目指している。また、教育病院で行う歯科治療では、診療ごとに多くのスタッフや学生が関わることから、診療に参加した学生の評価は指導医だけでなく、診療スタッフなどからの評価もあり、さらに自己評価も必要とされている。一方で診療の中心となる患者からの評価も必要ではないか、との声も上がっている。患者を全人的・全身的に捉える態度を養うことが診療参加型臨床実習の目的であるならば、患者からの評価が無ければ十分な評価が得られているとは考えにくいからである。診療を受ける患者が、次世代の歯科医師を養成しているとの考えをもっているのであれば、そして診療担当者が学生であるとの認識があるのならば、歯科医師養成の施設である教育病院に来院している以上、学生が診療に参加することを否む理由はないはずである。さらに来院患者だけでなく、教育病院からの訪問歯科患者やその家族においても同様であると考えられる。

今回このシンポジウムでは、「診療参加型臨床実習に参加する学生に対する患者からの評価を考える」と題し、まず九州歯科大学の鬼塚千絵先生に診療参加型臨床実習での学生評価の考えを発表していただいた。そして、医療面接などの非侵襲的歯科医行為における患者評価を松本歯科大学の藤井健男先生に、窩洞形成などの侵襲的歯科医行為における患者評価の考えと実践を日本歯科大学生命歯学部の大津光寛先生に提示していただいた。さらに、今後全ての歯科学者が経験するのであろう訪問歯科診療時の患者もしくは家族からの評価をどう考え実践するかを、北海道医療大学の斎藤隆史先生に述べていただいた。

患者中心の医療が叫ばれる中で、全ての歯科大学・歯学部の診療参加型臨床実習で患者が学生の評価に参加することは、未来の良医育成に必要不可欠であるとの結論を得た。

診療参加型臨床実習での評価はどうあるべきか

鬼塚千絵

高等教育において、卒業認定にあたりディプロマポリシーに示された知識、技能、態度等の学習成果の修得を把握し、評価することが必要であり、学習成果を様々な観点から把握し評価する方法を開発し、適用することが求められている。このうち診療参加型臨床実習における評価は、Millerのピラミッドモデル¹⁾における、Knows, Knows how, Shows how, Does という段階の中で、「Knows: 知っていること」を評価する口頭試問や筆記試験だけでは臨床能力の評価は不十分であり、「Does: 実際に行っている」をいかに評価するかを考慮しなければならない。そのためにはポートフォリオ、mini-CEX (mini-Clinical Evaluation Exercise: 簡易型臨床能力評価法)そして360°評価が良いといわれている。

今回のシンポジウムでは、九州歯科大学で実施してい

¹⁾ 日本歯科大学生命歯学部部長

²⁾ 九州歯科大学口腔機能学講座総合診療学分野

³⁾ 松本歯科大学病院総合口腔診療部門

⁴⁾ 日本歯科大学附属病院総合診療科1

⁵⁾ 北海道医療大学歯学部う蝕制御治療学分野